

「温泉付き住宅地“フィオーレ喜連川”の住民活動」



大河原 千晶 (おおかわら ちあき)

NPO 法人ポン・テ 代表理事・さくら市議会議員

転勤先の栃木に来て間もなく東日本大震災を経験。その際、栃木人の生きる強さやコミュニティの力に衝撃を受けこの中に入りたい!とまちの人たちと関わるようになる。在住のフィオーレ喜連川で管理組合/自治会事務局を昨年度まで務めており、その際に感じた住宅地ならではの課題を解決するためNPOを立ち上げる。同住宅地は第9回「住まいのまちなみコンクール」住まいのまちなみ賞受賞。NPOの代表理事の他に、さくら市議会議員も務める(二期目)。保護司、青少年指導員など様々な地域ボランティアでも活躍中。

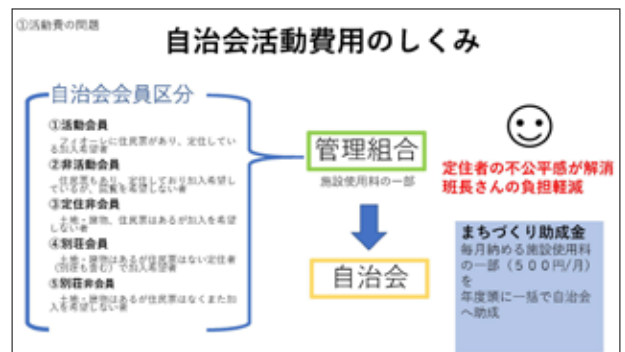
温泉付き住宅「フィオーレ喜連川」の成り立ち

私の住む「フィオーレ喜連川」は、栃木県さくら市に温泉付き住宅としてJR東日本が開発し、平成4年に誕生して26年たっています。お家の中で温泉に入れるのが特徴で、リタイア後の余生を田舎ライフで楽しみたいという首都圏からの移住者が多く、65歳以上の高齢者が住民の40%を占め、2050年の日本の人口推計パターンとほぼ同じと言われています。約5人に1人が75歳以上の後期高齢者というまちです。

緑豊かな里山に、首都圏から移住者が来られる。移住する方は、皆さん、ついでに住みかだと思って移り住んでくるので、自分がいた都会と比較し、こうしてくれ、ああしてくれと要望が多い。けれども地方自治体は財政が豊かではないので要求が通らない。口うるさい人が多いということは、裏を返せばまちにすぐ関心が高いということです。60歳代、シルバー世代はお元気でも、年をとってくると暮らしの中で不自由を感じる事が多くなります。静かな田舎で趣味を楽しみながら暮らしたいと思っていた方も体が動かなくなると、病院や買い物をするところが近くにないので、ここでは暮らせないと首都圏に戻られる方や老人ホームに入られる方が増え、住む人がいなくなって、地域の価値を下げることに繋がりました。

自治会と連携した管理組合の創設

助け合いの精神である自治会の必要性が高まってくる。自治会は住む人が少なければ活動費の捻出は難しい。定住者以外にセカンドハウスとしてお使いになれる方も一定数おられますし、自治会費を徴収したくてもお金が集まらないという問題や高齢化による担い手不足。それから自治会は2年任期なので、連続性の維持が難しくなってしまいます。あとは、皆さん、地元の人ではないので地域のパイプ役の不在が課題となっていました。



フィオーレ喜連川の自治会活動費用のしくみ

フィオーレにおける管理組合と自治会は、役割が全然違います。管理組合の役割は、共用施設、温泉、下水施設、ケーブルテレビの共用施設の管理ですが、実際に住んでいる人は、管理組合には無関心なので、草が

ぼうぼうな空き地があるといったような苦情が、管理組合に集まってきます。管理組合は、新しく土地を購入した人は必ず入るもので、地域の情報把握は管理組合のほうがよくできるので管理組合と自治会の垣根をとってしまおうと管理組合内に自治会の事務局が誕生しました。管理組合で集金し、自治会の活動費に充てることができています。役員の引き継ぎがないということも自治会事務局があれば、連続性を持ってでき、高齢化の担い手不足も自治会の事務局がサポートさせてもらえればいいと、管理組合と自治会の垣根をなくしてやっています。

エリアの魅力を高める住民活動

フィオーレ喜連川は、すごく広くて住民同士のつながりがあまりないので、どんな人が住み、どんな魅力があるのかといったローカルな地域情報の広報誌をつくり、皆さんに知ってもらって連帯感を生みました。フィオーレの独自の事例ですが、自主防災組織の結成。



広報誌で広がる地域コミュニティ

高齢者見守り体制を自治会で取りまとめています。セコムさんと協力し、廊下にセンサーを設けて、一人暮らしの高齢者が24時間通らないと、セコムが駆けつけるサービスもはじまりました。

私のお勧めは、自治公民館お掃除隊です。自治公民館は、サークルが25団体ぐらいあり、公民館活動のスケジュール管理やお掃除の負担を減らすために、事務局がお掃除隊なるものを結成し、明日だよと電話をかけるようにしています。断りやすい状況をつくるために、わざわざ明日だよというようにし、特にルールを決めず、お茶飲みまで含めて活動しています。

地域に持続性をもたせる 多様な取り組み

フィオーレの中には路線バスが通っていますが1日3本と少ないので、自治会がバス代を負担し、みんな乗ってねというように働きかけをしています。イベント時の工夫として、住民に還元される仕組みづくりをしていましたが、この仕組みは、人間関係が理由で今年

からなくなってしまった。コミュニティを語る上では避けられないのが人間関係です。

これにめげずにNPO法人を立ち上げ、買い物難民の人を救うためにオーガニックの八百屋をつくっています。ここが皆さんの集まる場所になり、情報共有でき



オーガニック八百屋の「まんまとちぎ」

るサテライト的な役目をし、地域の中にレストランもたくさん生まれています。住宅地の中にお店をつくってはいけないという建築協定を廃止し緩和することで、空き家が改築して店舗として生まれ変わったり、競売物件だった賃貸住宅が和食店になったり、集合住宅の1階を改装してカフェをつくるといった新しい循環が生まれています。これは地縁がないという弱みが逆に強みになっていると思います。

現在、フィオーレは、公共施設の指定管理の働きかけも行っています。住宅地の中にある湖沼公園と野球場、テニスコートと3つのスポーツ施設が休眠状態です。ここに民間の指定管理に入ってもらいテニス教室を開くと、どんどん活性化していく。施設が活性化するとまちが賑わい、行政とのパイプもできます。ピンチはチャンスということで、この先、フィオーレ喜連川は、新しく形を変え、時代とともに変化しながら住みよいコミュニティができていくと信じて活動しています。



市の管理下で休眠状態の施設に民間活力を促す働きかけ

※本文の内容は、シンポジウム開催当時の公演内容を出演者別にまとめたものです。